

若者クリエイト部会
平成25年度活動報告書

平成26年2月
徳島県総合計画審議会
若者クリエイト部会

目 次

はじめに	・・・	頁 1
徳島県総合計画審議会「若者クリエイト部会」開催状況	・・・	2
【第2回】(平成25年4月12日開催)	・・・	3
【第3回】(平成25年8月5日開催)	・・・	11
【第4回】(平成25年11月11日開催)	・・・	23
【第5回】(平成26年1月31日開催)	・・・	34
【参考資料】		
徳島県総合計画審議会設置条例	・・・	46
徳島県総合計画審議会部会設置規程	・・・	47
徳島県総合計画審議会「若者クリエイト部会」委員等名簿	・・・	48

はじめに

徳島県総合計画審議会「若者クリエイイト部会」は、県政運営の指針となる「いけるよ！徳島・行動計画」の調査審議機関である「総合計画審議会」のもとに、県政運営への若者の参加をより一層進め、これまでにない「若者の若者による徳島の未来創造」のための部会として、若者の既成概念にとらわれない「柔軟な発想」や、将来の本県の飛躍に繋がる「夢のある発想」に基づく議論の展開を踏まえ、その意見や提言を、新たな政策創造の「種」となるよう活かしていくことを目的に設置された部会であります。

平成25年3月7日に第1回部会を開催して以降、本年度においては、4月に「国への政策提言」に向けた議論を行い、8月には県西部地域、11月には県南部地域への現地視察を行い、「人口減少社会における地域を支える仕組み」をテーマに、県内でも一層厳しい条件下にある過疎地域において、創意工夫を重ねながら、日本のこれからのモデルともなりうる取組みの現場を調査いたしました。

この度、次代の徳島を担う若者世代代表としての声をお伝えするべく、平成25年度における部会活動を総括した取組状況を取りまとめましたので、徳島県総合計画審議会部会設置規程第3条第2項により報告いたします。

平成26年2月

徳島県総合計画審議会「若者クリエイイト部会」

部会長 青木 正繁

徳島県総合計画審議会「若者クリエイト部会」開催状況

【第1回】

日 時：平成25年3月7日（木）午後3時30分から
場 所：県庁10階大会議室
内 容：・部会運営について
・意見交換

【第2回】

日 時：平成25年4月12日（金）午後3時30分から
場 所：県庁10階中会議室
内 容：「国への政策提言に向けて」をテーマに意見交換

【第3回】

日 時：平成25年8月5日（月）午後
場 所：東みよし町、三好市、美馬市、
西部総合県民局美馬庁舎2階中会議室
内 容：「人口減少時代における地域を支える仕組み」をテーマに
県西部地域への現地視察及び意見交換

【第4回】

日 時：平成25年11月11日（月）午後
場 所：美波町、
南部総合県民局美波庁舎3階301会議室
内 容：「人口減少時代における地域を支える仕組み
～地域が直面する重要課題への対応～」をテーマに
県南部地域への現地視察及び意見交換

【第5回】

日 時：平成26年1月31日（金）午後4時30分から
場 所：県庁10階 大会議室
内 容：・部会活動報告
・「人口減少時代における地域を支える仕組み
～今後の徳島づくりを見据えて～」をテーマに意見交換

【第2回】（平成25年4月12日）部会活動状況 於：県庁10階中会議室

【「国への政策提言に向けて」をテーマに意見交換】



徳島県総合計画審議会「若者クリエイト部会」 次第

日 時 平成25年4月12日(金)
午後3時30分から
場 所 徳島県庁10階 中会議室

1 開 会

2 議 事

(1) 国への政策提言に向けて

(2) その他

3 閉 会

【配付資料】

資料1 国への政策提言に向けて

国への政策提言に向けて

1. 政策提言の考え方

本県が行っている政策提言は、「知恵は地方にこそあり」との気概を持って、「日本の羅針盤」となる「徳島発の政策」を提言し、徳島が課題解決の「実証の地」となり全国に発信していく、つまり、「徳島発の提言」が、日本の標準「ジャパンスターダート」となることを目指して行っているものです。

政策提言については、次年度の国の各種政策立案に向け、本県の意見が、国の制度設計、予算編成にしっかりと反映されるよう、例年5月に実施しているほか、その時々「国の動き」や「喫緊の政策課題」に応じ、臨機応変に時機を捉えて緊急提言を実施しています。

2. 三つの主要なテーマ

県政の重要課題である、「経済・雇用対策」、「安全・安心対策」、「宝の島・とくしま」の三つのテーマの概要については、それぞれ次のとおりです。

○「経済・雇用対策」

→ 現下の非常に厳しい経済・雇用情勢を乗り越えるべく、経済の活性化や新たな雇用の創出を図る。

○「安全・安心対策」

→ 南海トラフ巨大地震等、大規模災害発生への備えなど、県民の安全・安心を確保する。

○「宝の島・とくしま」

→ 本県の優れたポテンシャルを最大限に活かし、我が国の「将来のあるべき姿」を見据えた「新しい時代を切り拓く徳島からの処方箋」により県民の皆様方の夢や希望の実現を徳島で目指す。

【第2回】

日時:平成25年4月12日(金)午後3時30分から

場所:県庁10階中会議室

内容:「国への政策提言に向けて」をテーマに意見交換

1. 部会の概要

県政の重要課題であり、「徳島発の政策提言」を構成している、「経済・雇用対策」・「安全・安心対策」・「宝の島・とくしま」の三つのテーマについて意見交換を行った。

2. 主な意見

(1)【経済・雇用対策関係】

- 農業に興味があっても採算とれない。農業法人化できて規模が大きくなれば、自分の生活スタイルにあった働き方ができるかも。
- これから農業法人化が重要。安定してない仕事で就業を嫌う若者が多い。規模が大きくなれば安定し、販売戦略が立てられる。
- 定年を迎えた方々が地元に戻って農業するケースが増えており、農業に従事できるよう促進できれば。
- 地域づくり、まちづくりに関して、徳島にも素材はあると思うが、十分な掘り起こし、発信がなされていない。プロの目が必要で、地域を見てコーディネートして、売り出していくことが必要では。
- 保育士の給与アップが急務。保育士が増えれば、一時保育の受入が増えるのでは。

(2)【安全・安心対策関係】

- 大規模地震ではインフラが全部ダメになるので、代替手段を予め持つておくような施策をもっておくべき。
- 防災の観点で、避難路をふさぐ住宅等については、行政の立場から何らかの対応(規制、補強等)ができないか。
- (自転車レーンの整備に関して)高速道路の全国共通料金化に合わせて、大鳴門橋を自転車が渡れるようにして、「ツールド徳島」を開催してはどうか。

(3)【宝の島・とくしま関係】

- 運転できないお年寄りや子どものためにも公共交通機関の発達が重要。バス路線等が廃止されているが、連携して足の確保ができないか。
- フリースポットは、費用対効果という意味で考えるとコストは相当安く、全県で整備して、そういうのを売りにしていければ。
- 「おいしい！広島県」ではないが、徳島を「得します県」というふうに、徳島のいいところを集めてピーアールしてはどうか。

○提言一覧

テーマ:「国への政策提言に向けて」

【ポイント】 「徳島発の政策提言」に向けた議論 ①「経済・雇用対策」関係 ②「安全・安心対策」関係 ③「宝の島・とくしま」関係	
No.	提 言 内 容(※会議中に整理した表記による)
1	① ・ 保育士の給与アップが急務。 ・ 子どもが小さいときは、潜在的な働く意欲があっても一時保育は狭き門。 ・ 保育士が増えれば一時保育の受入が増えるのでは。
2	① ・ ワークシェアリング誰がするんだ→県庁とか行政が率先してやるべき。 ・ 部署代わるまでの3年は思い切って午前中だけの勤務とかできないのか。 ・ 介護休暇取得率が今後変わってくると思うので、その世代の方が抜けても仕事が回るような仕組みが必要。 ・ 耕作放棄地対策、景観を守る観点からも農業法人化が重要。 ② ・ (自転車レーンの整備に関して) 高速バスで自転車便をつくらたいのでは。ヨーロッパで見たのはバスの外に付けられていた。 ・ (バイパスの木が少ないことに関して) 木が少ないのは、行政側の視点で安全を優先したり、地域住民への配慮などの理由があるが、「緑が多いまちづくり」に向けた県民意識の改善や発信をしてはどうか。 ・ 防災の観点から、住宅や建物の耐震化はいろんな取り組みをしているが、避難路を塞ぐ個人の住宅については、行政の立場から何らかの対応(規制、補強等)ができないか。
3	① ・ (ワークシェアリングに関して) 県でも男性の育休はとりにくい実態。病休を率先してとるようにしているが、実態としてはできてないかも。県庁で午前中だけの勤務とかといった取り組みはないようだ。 ・ 薬膳、漢方は需要が見込まれるが中国からほとんど輸入している。徳島は生薬が栽培できる土地のようだ。県が行っている取り組みを拡大してほしい。 ② ・ 会社に近い形で経営ができれば農業への参入が進むのでは。規制緩和が進まないのは何かネックがあると思うので、そのハードルを越えることができれば。 ・ 農業に興味があっても採算とれない。自然相手なので生活計画がたたない。農業法人化できて規模が大きくなれば自分の生活スタイルにあった働き方ができるかも。若者の農業への就業を考えた場合に、集約化と法人化がもっと柔軟にできれば。
4	① ・ (ワークシェアリングに関して) 県でも検討しているようだが、民間でこうしなさいとかガイドラインの提案等にとどまり、できてないようだ。子育て世代は子どもを預けられないと困る。 ・ 「有機JAS認証」は農水省がやっているようだ。登録作業を行うようなNPO法人とかが出てくれば。 ・ 農業法人化はやってるが、まとめる人がいない。県とかで相談に乗れるような仕組みができれば。 ② ・ (自転車レーンの整備に関して) 自転車レーンについては、徳島大学の山中教授が研究していると思うが、安全、観光的にもやっていく必要があると思う。複合してやるともっと効率的にやれると思うが、できるような智恵がないものか。 ・ (自転車レーンの整備に関して) 自転車で、漕いだ分だけエネルギーを蓄え何かに変換できるシステムがあれば。
5	① ・ 東みよし町では企業からの生薬需要に対応できていない。耕作放棄地で栽培して薬草が広まり、町民が健康になればハッピー。

6	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 定年を迎えた方々が地元に戻って農業するケースが増えている。定年を迎えた方を農業に従事できるよう促進できれば。 ・ 若者にすぐに農業をやってほしいというのはハードルが高いと思うので、体験型農業や観光型農業みたいなもので触れ合ってもらいながらやってもらおうということも推奨してみてもどうか。 ・ 資本主義的な大きなところを推奨していかなければいけないところと、ハートのところを求める両面が併存しているような状況だと思う。「有機JAS」とか大きなところになるとそこを目指していかないと難しいと思うが、個人で自分たちで消費する分には、「土も水もわかっているから大丈夫」という安心感の部分に分けて考えてもよいのでは。 ・ (地域づくりに関して)「地元を発信する」ということで、毎年ニューヨークに阿波踊りをしに学生たちを連れて行っている。「地元を発信するんだ」という思いで行った子たちは、帰ってきてから地域のコーディネート的な役割を自ら進んでやるような傾向にあるので、そういう取り組みにより徳島を発信する「観光大使」づくりみたいなことをしてもいいのでは。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ (自転車レーンの整備に関して)自転車のイベント自体が増えれば整備しないとという空気になるのではないか。 ・ (自転車レーンの整備に関して)視点はエコ。自転車での通勤を推奨した会社の表彰とかは簡単にできるのでは。それが全国的に多くなるとブランディングができたりとかするのでは。 ・ (自転車レーンの整備に関して)東京で自転車便をよく使うが、例えば、徳島市内5キロ圏内の自転車便、バイク便を、リタイアした体力をつけたいという人にやってもらえれば糖尿病対策にもなるのでは。 ・ (自転車レーンの整備に関して)ルール・マナーを守れるかっこいい自転車乗りを増やす文化を創生するという意味で、例えば「しまなみ海道」みたいに「大鳴門橋」を走るイベントをやってみてはどうか。 ・ バイパスの木が少ない。昔はもっとあった。中央分離帯の木が道路が拡がって少なくなった。木があると心が和んで交通事故も減ると思う。
7	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「有機野菜」として販売するには、「有機JAS認証」が必要とのこと。かなり厳しいチェックかかるので、そこら辺がクリアできるような支援があれば消費者にとってもよい。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ (自転車レーンの整備に関して)地球温暖化対策の観点から、香川県でやっているように、自転車を漕いで発電させたり、自転車ですごんを食べにいったら安くなるとか、イベントとからめられたら。
8	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これから農業法人化が重要。安定してない仕事で就業を嫌う若者が多い。規模が大きくなれば安定し、販売戦略が立てられる。直接流通させることができメリットが多い。 ・ 農地への意識→農地を誰にでも貸したくない。法人であれば貸しやすくなるのではないか。 ・ 農業法人化されないのは法人化する必要がないという個人もいるからではないか。
9	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 畑を守って畑がある景色こそが一番観光の財産になる。若い世代が志したい農業というのは、従来の農業とはちょっと違うのではないか。暮らしの質、食べ物に対する考え方も変わってきている。質のいいものを食べながら生活したいという思いのもとに農業をやってみたいということ。個人ファームみたいなものが一緒になって、ある程度の流通量を確保できれば。 ・ リタイアした人が地元に戻ってきて農業を始める場合など、そういったところをサポートする仕組みづくりが行政主体でできれば。サポートされた方がスーパーバイザーになって、また後続を育てるといった新しい農業のかたちがあれば。

10	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域づくり、まちづくりに関して、地元住民では客観的な目で見れず気づかない部分がある。良さを掘り起こしてくれる人がたくさんいてくれたらと思う。徳島にも素材があると思うが、十分な掘り起こし、発信がなされていない。プロの目が必要で、地域を見てコーディネートして売り出していく。アレックス・カーさんのように上手いことパッケージして売り出していければ。「地域力創造アドバイザー制度」といった制度もある。「地域おこし協力隊」は県内でもやっている。売り出し方を見えている人にコーディネートしてもらうことが必要では。 ・ (サテライトオフィスに関して) 神山は地元AIRの取組みが下地としてあったからできたのかも。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ (自転車レーンの整備に関して) 自転車を交通機関としてもっと注目してほしい。30キロくらいは出てしまう。自転車の空間を整備しようという動きがある。それは車のドライバー、歩行者にとってもいいこと。国にガイドラインがあり、あとはやるだけだが、予算的なものもある。
11	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ (地域づくりに関して) アドバイザー的なものはいろんなところでやっている。いいアドバイスはいただけるが、実際どこまでできるか受入側でしっかり取り込む意思統一ができていないと活用しきれないと思う。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ (自転車レーンの整備に関して) 自転車の通勤率は徳島市が一番と新聞に載っていたが、生活に根ざした活用ができないものか。 ・ (自転車レーンの整備に関して) 徳島市役所(勤務先)でも、「5キロ以内は自転車」とかいう取組みをやっていたらいいかなと思った。 ・ 大規模地震ではインフラが全部ダメになるので、代替手段を予め持っておくような施策をもっておくべき。
12	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ (サテライトオフィスに関して) ICTは特殊で、パソコンがあれば仕事ができると思うところがあるので、たまたま受け入れやすかったのでは。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ (自転車レーンの整備に関して) 自転車に乗っている人はルールを守っている。自転車のイベントをもっと増やし、アスリートを呼んできて、「マナーを守ること自体が格好いいこと」というふうになれば、マナー啓発にもつながるのでは。 ・ 「安全・安心」という意味では、行政からのメッセージが適確に届かないといけないので、「すだちくんメール」をもっと活用すべき。入っている人は少ないが、システム改善などにより加入率を上げてほしい。災害は時間が経つと忘れるので、定期的に情報配信してもらえるといい。 <p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ フリースポットは費用対効果という意味で考えるとコストは相当安く、すぐ徳島市を覆えると思うので、全県で整備して、そういうのを売りこにしていければ。神山でも何カ所かフリースポットがあるが、似たようなことをすぐ徳島市でもできるのかなと思う。
13	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 県のHPの中に「阿波ナビ」があるが、フェイスブックの「いいね」のような数字で拾い上げるといった観点から「阿波ナビ」を改善したらいいのでは。
14	<p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ (自転車レーンの整備に関して) 子どもの教育の観点から、全国共通の自転車検定(教育)をやればいいのか。教育の中にも自転車マナーを全国一律に取り入れられれば。 ・ (自転車レーンの整備に関して) 高速道路の全国共通料金化に合わせて、大鳴門橋を自転車が渡れるようにして、「ツールド徳島」を開催してはどうか。 ・ (自転車レーンの整備に関して) 「南阿波サンライン」を使って自転車レースをするのも自転車のためにいいのでは。バイクレースもしたらいい。大胆な企画を打ち出して行くべき。

15	<p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（自転車レーンの整備に関して）仕事で勝浦町に定期的に行っているが、バスか同僚の車でやっている。バスが午前、午後2本ずつで肝心な時間帯になく自転車で行っているが、自転車を乗り始めたら、車道、歩道も走りにくい。自転車が走りやすい道になると助かる人が多いのでは。 <p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 係船方法に関して、撫養航路を通ったりしていても停めてはいけないところに停めているようだが、係船場所が足りないらしいので、係船場所を増やすのと、不法係留には厳しく対応するべき。
16	<p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「徳島は車がないと生活できない」とよく聞く。運転できないお年寄りや子どものためにも公共交通機関の発達が重要と思うが、バス路線等がどんどん廃止されている。スクールバスや乗り合いバスの活用とか、他と連携して足の確保ができないか。
17	<p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 小さい子ども連れが遊びに行くときは車がほとんど。公共交通機関では他の人に気を遣うので、例えば、鉄道であれば「ファミリー限定の車両」など、子育て世代が公共交通機関を使って観光に行くといったシステムができれば、公共交通機関と観光地の活性化につながるのでは。
18	<p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 広島県の例「おいしい！広島県」ではないが、徳島を「得します県」というふうに、徳島のいいところを集めてピーアールしてはどうか。徳島に都会的要素は要らないと思っており、県外の若い友達は癒しを求めているので、そういうピーアールの仕方があるのではないか。
19	<p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（自転車レーンの整備に関して）道はつくる側の事情もある。徳島の道はがたがたのところがあって、自転車が走る環境も整えなければならないのかなと思うが、道路計画は長期スパンで考えるので、難しい面もある。 <p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ゴミ飛散等を防ぐため、ゴミ収集システムがどうにかならないかと思っていた。道路上に占用許可をとってというのは個人では難しく、公共団体でハードルをクリアしていかなければというのがあり、原則、私有地につくることになっているが、分譲地とかにゴミ収集場所を計画的につくることができればと思う。 ・ 漂流物という観点から、震災時を想定し、川の流れを阻害する邪魔なものを予め除いておくまちづくり、水の力が来ても流れないような画期的な係船方法なども景観面に配慮しながら考えるべきではないか。

【第3回】（平成25年8月5日）部会活動状況 於：東みよし町、三好市、美馬市、 西部総合県民局美馬庁舎2階中会議室県庁10階中会議室

【「人口減少時代における地域を支える仕組み」をテーマに
県西部地域で現地視察・意見交換】



徳島県総合計画審議会「若者クリエイト部会」 次第

日 時 平成25年8月5日(月)

午後4時40分から

場 所 西部総合県民局

美馬庁舎2階中会議室

(~ 現 地 視 察 ~)

1 開 会

2 議 事

(1) 人口減少時代における地域を支える仕組み

(2) その他

3 閉 会

総合計画審議会「若者クリエイト部会」における現地視察について

背景

我が国は、出生率の長期的な低下が続く一方、総人口に占める高齢者の割合が急速に増加するといった本格的な少子高齢社会を迎えております。

このような中、世帯主が65歳以上の単独世帯や夫婦のみの世帯、また、認知症高齢者の増加が見込まれ、高齢者が住み慣れた地域でその人らしく生活し続けるための体制づくりが必要となっています。

本県においては、全国よりも高齢化が進んでいる中で、全国に比べ「介護保険施設の整備率」や、「人口10万人当たりの医師数が多い」など充実している点がある一方で、いわゆる限界集落など、「高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けることが困難になりつつある地域も実在」しており、高齢者支援のあり方など、少子高齢化や人口減少の加速を背景とした諸課題への対応が急務となっています。

目的

～「人口減少時代における地域を支える仕組み」をテーマに現地視察を踏まえ意見交換～

超高齢社会の真っ直中を生きることになる「若者」に、県内でも一層厳しい条件下に置かれている過疎地域等において、創意工夫を重ねながら、日本のこれからのモデルともなりうる取組みを行っている現場を視察していただきます。

現地視察を通じて、現状や課題について感じたことや、様々な観点から、人口減少時代における地域を支える仕組みに関して、幅広く意見をいただき、今後の県政推進にあたっての参考にするとともに、可能な限り県の施策等に反映することを目指します。

全体行程表

8月5日(月)

時刻	内容
12:00 移動 100分 トレ休憩含む	出発 (県政バスに乗車し視察地に向けて移動) ・乗車場所: 県庁北門 ※今回の現地視察の概要などを車中にて説明させていただきます。
13:40 (見学 30分) 移動 20分	視察ポイント① (地域振興・高齢者福祉関係) ・場所: いやしの里 増川笑楽耕(東みよし町東山字増川264-2) ・概要: 高齢者が地域活性化の担い手となり、現在も現役でご活躍をされている取組みを視察していただきます。
14:30 (見学 15分) 博愛センターへ移動 3分	視察ポイント② (医療・介護関係) ・場所: 小規模多機能 弥生(三好市池田町州津藤ノ井372番地3) ・概要: 住み慣れた地域で介護サービスを受けられる、新しい介護保険サービス「小規模多機能」を視察していただきます。
14:48 《博愛センター》 事業説明・見学 7分 西落地区 15分 自宅まで移動 7分 《訪問対象先》 視察 13分 美馬市へ移動 40分	視察ポイント③ (高齢者福祉関係) ・場所: ほっとかない事業「いろどり屋」(三好市池田町西山落地区) ・概要: 過疎地で生活するひとり暮らし高齢者の生活をサポートする、「ほっとかない事業」を視察していただきます。
16:00 (見学・移動 40分)	視察ポイント④ (高齢者福祉関係) ・場所: 美馬ふれあいバス(美馬市内) ・概要: 交通手段を持たない高齢者の生活をサポートする、「美馬ふれあいバス事業」を視察していただきます。
16:40 (会議 30分) 移動 50分	意見交換会 ・場所: 西部総合県民局 美馬庁舎(美馬市脇町大字猪尻字建神社下南73) ・概要: 今回の視察を振り返り、超高齢社会における諸課題への対応や今後の県政推進について参考とするため、意見交換を行っていただきます。 ※ 終了次第、県庁へ向け出発。(希望者は現地解散も可能)
18:00	到着 (県庁に到着・解散)

※ 現地視察の会場によっては、多少スケジュールが変更となる場合があります。

※ 当日、意見交換が時間の都合により、実施できなかった場合は後日、メール等でお願ひすることがあります。

【第3回】

日時:平成25年8月5日(月)午後

場所:東みよし町、三好市、美馬市、西部総合県民局美馬庁舎2階中会議室

内容:「人口減少時代における地域を支える仕組み」をテーマに
県西部地域への現地視察及び意見交換

1. 部会の概要

「人口減少時代における地域を支える仕組み」をテーマに、地域振興や高齢者福祉、医療・介護関係の取組みの現場を視察した後、「高齢者が、地域に『支えられる』のではなく、『支える』存在であること」や、「住み慣れた地域・自宅で生活を継続するための支援の充実」といった視点から、意見交換を行った。

2. 主な意見

(1)【高齢者が地域を「支える」存在】

○ 「増川笑楽耕」での話にあったように、「必要とされている」ことこそがとても重要。それは若い世代にも必要な感覚で、高齢者、若者とカテゴライズするのではなく、高齢者に特化した「必要とされている」感覚が味わえるような取組みを行うことが重要。

「増川笑楽耕」のインストラクターとして若い世代、子供たちへ教えることは、長年培われた経験の賜物であり、その特性を十分に活かしている事例。

○ 取組みの分野を考えたときに、すぐに思いついたのは「子育て支援」。多世代間交流にもつながるが、高齢者は経験・知恵・人脈を持っているので、そのマンパワーを活用しない手はない。

子どもにとっては、高齢者と接することで豊かな心を育むこと、高齢者にとっては、子どもと触れ合うことで元気になること、そういう分野でも活躍できると思う。

(2)【高齢者が住み慣れた地域等で生活継続】

○ 「ほっとかない事業『いんどり屋』」のような注文形式と移動形式のミニコンビニ、スーパーみたいな訪問販売型や配食専門の事業など、生活に密着した「買い物と食」に関する事業は更に拡大、充実すべき。

○ 住み慣れた地域・自宅で生活を継続するためには、健康の維持が一番ではないか。そのためには、高齢者にもできるだけ自宅を出る機会を増やすべき。今回視察した「オンデマンドバス」はそういった機会増加に資するもの。

(3)【共通】

○ 「地域の方が生きる」というのは、衣食住という最低限のことに加え、「いきいきと生活する」ということが重要だが、今回視察した取組みは、どれも継続するには経済的にすごく厳しいというのが現状。

今後の課題は、それぞれの取組みがビジネスとして成り立っていくシステムの構築がまず重要で、あとは、地域住民一人一人が、地域を支える取組みの担い手であるという認識を持つような社会にしていく必要がある。

行政、地域住民、その他の人たちが一緒になって、「支え合えるような社会」というものに挑戦することが必要ではないか。

○提言一覧

テーマ:「人口減少時代における地域を支える仕組み」

No.	提 言 内 容
1	<p>【ポイント1】 「高齢者が、地域に『支えられる』のではなく、『支える』存在であること」といった視点から、 ①高齢者が社会の担い手となるにはどのような取組みの種類(分野)があるか ②①を支援する上で、地域(行政)がバックアップすべき取組みとは</p> <p>① ・ 若手を教える。先生になる。 ・ 今まで生きてきたことを実感してイキイキする。</p> <p>② ・ 対象となる若手を呼ぶ。</p>
2	<p>① ・ 山間地が多い徳島県では農業を中心とした取組みが必要。集落営農や農作業の共同化等の活動を行うことが、地域コミュニティの維持や活力づくりにつながる。 ・ 「増川笑楽耕」のような地域資源を活かした取組みを行うなど、地元を大事に思う気持ちが原動力となる。外部から褒められたり注目されることで、より郷土愛を深め、活動に意欲が湧くと思う。 ・ 一人ではなくみんなの力で地域を支えることが重要。</p> <p>② ・ 軌道に乗るまでのルール作りや情報提供等の活動支援 ・ 地域で取り組んでいる内容の情報発信</p>
3	<p>(①②共通) ・ 地域の仕事が、そこに住んでいる以上手伝わざるを得ないという半強制では、ますます田舎のしがらみを嫌った若者は減り、新しい人も入って来にくいと思う。 ・ これから高齢者となる団塊世代はパソコンを使える人も多いので、ネットワークを利用し、どんな仕事をどの程度したいのか？個々のニーズと、それを求めている人のマッチングがスムーズにいくようなシステムづくり ・ 「増川笑楽耕」のような廃校校舎利用について、卒業生や保存したいと願うメンバーでファンクラブのようなものをつくり、年会費や寄付金を募り運営に充てる。年に数回、教科書を持ち寄る会や校歌を歌う会を催し、参加費等も運営に充てる。</p>
4	<p>(①②共通) ・ 団塊世代の先頭が65歳となり、今後高齢者人口が増加することは避けられない。いかに団塊世代の方々が健康でいられるかにより、今後の介護保険料、医療費の増大が左右されるのではないかと。 ・ 健康で、生き生きとした生活を送るためには、「役割を持つこと」、「他者から必要とされること」が大切と、「増川笑楽耕」視察時にも感じた。 ・ 団塊世代が活躍できる場の確保、又は活動を始める“きっかけ”をつくるのが今後の行政の課題。仕事をリタイアし、第二の人生に入った団塊世代を対象に、自らの経験や知恵、人脈を活かし、地域や地元で活動できる“きっかけ”をつくる取組みが必要。</p>

5	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「増川笑楽耕」での話にあったように、「必要とされている」ことこそがとても重要と思った。それは高齢者に限らず若い世代にも必要な感覚で、高齢者、若者とカテゴライズするのではなく、高齢者に特化した「必要とされている」感覚が味わえるような取組みを行うことが重要。 ・「増川笑楽耕」のインストラクターとして若い世代、子供たちへ教えることは、長年培われた経験の賜物であり、その特性を十分に活かしている事例。 ・「小規模多機能施設」では、若い方々が手厚く介護している印象を受けたが、30年もすれば超高齢化社会は避けられない状況であり、元気な高齢者が介護する仕組みもあっていいのではないか。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今回視察したどの事業も利用率の向上が課題と言っていたので、「ニーズあっての事業では」と疑問に思ったが、それは行政が提供するサービスと利用者のニーズにズレが生じているからだと思う。せつかく評価の高い事業を実施しても利用されなければ価値を見出すことはできない。 ・プロジェクト・サイクル・マネジメント方式などを取り入れ、「実施→モニタリング→見直し」といったシステムを導入することにより、より良い事業に改善していけるようサポートしてほしい。 ・元気な高齢者が介護する側になるということについても、単なる手伝いではなく、ある程度の講習や実習を受け資格を得る等、徳島県が認定する資格制度の導入といったことも「必要とされている」ことに特化した取組みではないか。
6	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「増川笑楽耕」のような、その地域にある様々な資源を活かし、そこに暮らす地域住民が主体となり、「生き活きた豊かな心」を持って無理なく行える、地域特性に合った自らの地域活性化が大切。 ・分野としては、地域活性化・観光ボランティア・地域防災・伝統文化の継承・環境美化・農林水産業の地域の伝統的手法など。 ・キーワードとしては、「教える、伝える、共に歩む」・「世代間交流」・「地域住民自らの創意工夫のチカラ」・「地域を活かした生きがいづくり」。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域のネットワークづくり。住民同士、住民と行政もつなぐことが大切。 ・地域の情報発信の更なる充実とサポート ・逆に、地域で暮らす高齢者向けの情報の充実も必要。特に高齢者の場合、行政広報誌や回覧板などの情報を一元化してサポートすることも大切ではないか。 ・交流の機会を設ける。様々な世代間交流の場づくりのサポート ・地域事業の組織化づくりのサポート(NPO法人化、認定団体化) ・「増川笑楽耕」のような事業に対して、特に、社会福祉を目指す学生や教員、政策や法学を学ぶ学生などを対象に、全国の大学など高等教育機関とも連携して授業や体験学習に取り入れ、地域福祉学とともに地域の実態や取組みを学べるようつないでほしい。
7	<p>(①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢の線引きは曖昧で線引き自体難しいが、65歳以上を高齢者とするなら、田舎では地域を支えているのは高齢者。都会のサラリーマンなら定年があるが、農業従事者であれば体が動く間は現役という方もおり、田舎の主産業である林業や建設業では若い人の姿をほとんど見ない。言い換えると、若い人がいないため高齢者が支えている状態であり、このままでは支える人がいなくなり、地域が衰退していく。 ・それぞれの地域の特色である産業や観光資源について、高齢者が自分たちの経験や知恵を次の世代に上手く伝え、そこで引退するのではなく、次の世代と上手く融合できるようにサポートしていく必要がある。 ・「増川笑楽耕」では、地域のシンボルであった小学校の廃校を機に、地域住民が一致団結して観光資源として復活させようと努力しており、野菜づくりなどを若い人に教えることにより生きがいや健康づくりにつながっている話も聞いた。 ・今のままでは、事業を支えている人たちがいなくなると成り立たなくなるので、若い人も巻き込んで地域の産業として成り立つように改善を加えていく必要がある。 ・地域に昔からある産業・資源を若者にとって魅力のあるものに創り替え、若者を地域に呼び戻し、それを伝える誇りを高齢者に持たせるような仕組みをつくってほしい。

8	<p>(①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現に過疎地域(特に限界集落)を支えているのは、高齢者の皆さんであると認識しており、(1)次世代の者がどのように関わっていくか。ひいては「地域」を受け継いでいくか(2)そのために、行政はどうバックアップするべきかということが、自分にとっての問題意識。 ・ 「増川笑楽耕」の取組みからもわかるが、高齢者の中にも意欲的に自らの地域のことを考え、行動する方々は少なくない。そういった方に対しては、基本的には自発的な活動に任せ、取組みの種類(分野)を限定する必要はない(「増川笑楽耕」のように、食・技術・芸能といった伝統文化など地域の特性を活かし、かつ、高齢者だからこそできる活動が魅力的だが、「保育サービス」や「オンデマンドバス」でもいいと思う。) ・ 地域や行政のバックアップとしては、活動の支障となる事柄を取り除くこと(例:規制緩和)や、高齢者が苦手としていることへの対応(例:交通手段の提供、経営など専門知識のアドバイス)が基本と考える。 ・ 健康に不安がある、交通手段を持たないなど、高齢者が若い人から「支えられる」ケースもあるが、そこはむしろ「支える」能力を発揮するためにも、そういった場面があるのだろうと思う。若い世代と高齢者が相互に「支え」、「支えられる」関係ができれば、若い世代が地域に関わっていく機会も増えるのではないかと。
9	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者が「生きがい」を持つこと、社会貢献に参加することが、健康寿命の延伸、地域の活性化につながっていると感じた。「増川笑楽耕」では、地元の高齢者が農業体験等のインストラクター等を務めることにより活躍し、多世代間交流が生まれることで、いきいきとした生活を送ることにつながっている。 ・ それぞれ異なる特性を有する地域の実情に応じた取組みを、行政、民間団体、住民が、連携・協働して地域における維持可能な取組みとして構築し、推進していくことが必要。 ・ 地域の取組みは住民自身が主役になることから、自分たちの地域は自分たちの手で維持・活性化していくという「地域力の向上」や住民同士のつながりや支え合い、コミュニティー強化も重要と感じた。 ・ 「増川笑楽耕」は廃校舎を利用した取組みだが、他にも、農家の家に、都会からの修学旅行生に田舎暮らし体験として訪れてもらったり、都市の生徒が普段体験できない農山村のありのままの暮らしや地域の方との交流を通して、人として成長し、心の豊かさを感じ、「生きる力」というものを学ぶ機会にもなると思う。 ・ 取組みの分野を考えたときに、すぐに思いついたのは「子育て支援」。多世代間交流にもつながるが、高齢者は経験・知恵・人脈を持っているので、そのマンパワーを活用しない手はない。例えば、空き家を活用して集える場所であったり、相談相手であったり、幼老共生というか、子どもにとっては高齢者と接することで豊かな心を育むこと、高齢者にとっては子どもと触れ合うことで元気になること、そういう分野でも活躍できると思う。 ・ 「三好市シルバー人材センター」では、ごみ出しや買い物といった日常生活の簡単な作業を、100円から500円のワンコインで引き受けるサービスを実施しているのを新聞記事で見たが、高齢者が自分たちができる分野で活躍することで、地域に密着した社会貢献に参加するきっかけにもなると思う。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地域の需要、供給のマッチングやコーディネート、高齢者の方の地域参加へのきっかけづくり、情報提供が考えられる。
10	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ シルバー人材センター事業(就労支援事業) ・ シルバー大・中学校事業(社会に貢献出来る人材育成事業) ・ 友愛訪問事業(高齢者相互による見守り活動) <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 西部総合県民局保健福祉環境部(三好)が西部圏域を対象としたアンケート結果から、高齢者の考え方の傾向として、「まだ私は大丈夫」という考え(謙虚、迷惑をかけたくない等の気持ち)から、「日常生活での支援を必要ない」と考えてしまう傾向が見える。 ・ 逆に支援者(地域や行政、支援者【民生委員や高齢者施設職員】)へのアンケート結果では、「危なっかしくて見てられない」、「どんどん支援を受けるべきだ」、「支援を受ける準備をすべきだ」という傾向が見える。 ・ 以上から、支援を受ける高齢者と支援する側の意識のギャップを埋めることにより、高齢者を社会の担い手として考え、活用が広がり、また、高齢者が支援を必要とするハードルが下がり、住み慣れた地域で安心して生活ができるのではないかと。

11	<p>(①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者といっても個人差が大きく一括りにはできない。「支える」能力のある人が、その能力を十分に発揮できることが重要。 ・ 農業など生涯現役的な仕事もあれば、「増川笑楽耕」のように新たな分野にチャレンジするなど、様々な分野で社会の担い手になる可能性はあると思う。 ・ 徳島は「葉っぱビジネス」など伝説的な成功例もあるので、高齢者が地域の担い手となる先進地として、行政が高齢者のチャレンジを積極的に支援していったらどうか。
12	<p>(①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者が社会の担い手となるということは、 <ul style="list-style-type: none"> (1) 現役世代と同じく、労働の対価として報酬を得て納税をすること (2) 経験と知識を活かして地域社会活動に参加すること の大きく二つに分けることができる。 ・ (1)を進めていくためには、法律や企業の方針など、高齢者の雇用を国全体としてどう進めていくのかが大きなところ。働く意欲を持っている高齢者の就業を可能とする社会の意識や法整備などの環境づくりが必要。 ・ 「上勝町のいもどり」など、地域の資源や特性を活かして独自に高齢者の就労について成功事例をつくっているところもあるが、地域の資源や特性は、住民にとっては当たり前で気付かないことが多いので、そのきっかけづくりを行政が手助けすることが必要。 ・ 課題や状況等は地域によって様々で一括りに議論できないが、行政がバックアップすべき取り組みとしては、「外部有識者の招聘」や「行政手続きの助言」、「中心となる人材の育成」や「障壁となる規制の緩和」(吉野川市美郷・梅酒特区など)などが考えられる。すぐに成果を出すのは難しいので行政としても中長期的な視点で取り組んでいく必要がある。 ・ (2)を進めていくためには、社会貢献活動を担うための組織づくり、組織化するための高齢者同士、多世代間の交流の場づくり、社会貢献活動を受け入れる地域社会づくりが必要で、既存の組織を活用するとすれば、地域貢献活動や高齢者の交流の場として組織されている「老人クラブ」が考えられるが、近年は老人クラブへの参加者が減少の一途をたどっている。 ・ 「老人クラブ」は、通学路の安全見守りや美化活動、友愛訪問(高齢者の見守り)、郷土文化の伝承など、地域を支える組織として活動しているが、地域には、消防団、自治会、青年団、婦人会、PTAなど様々な組織があり、そういった団体と連携を図りながら老人クラブ活動ができれば、参加者も増えてくるのではないかと。 ・ 最近は、特に都市部などは地域のつながりが希薄になって地域活動への参加も減ってきていると聞いたが、同級生のつながりがあれば地域活動に参加しやすいのではないかと。小学校、中学校、高校の卒業時に、フェイスブックやライン等を活用して、地域とつながりが持てるような取り組みができればよい。 ・ 新たな組織づくりとしては、同じ志を持った高齢者が交流する場となる「シルバー大学校・大学院」、「農業大学校」を、新たな地域貢献活動団体の発信源となるような取り組みを進めていけばよいのではないかと。 ・ 行政としては、地域貢献活動を担おうとする組織や個人が活躍できる機会づくりをできる範囲でサポートし、地域住民に組織の活動を認識してもらうことが活動の継続につながっていく、高齢者の生きがいに結び付いていくと思う。 ・ 高齢者が「支える側」になるためには、高齢者のための施策を充実させることも重要だが、大前提として、地域活動や社会貢献活動などに参加するための「健康寿命」を延ばすことが先決。そのためには、将来への投資として、現役世代に対し、「食事改善」や「運動習慣」をつけてもらうような指導を行い、「生活習慣病」などを改善するための取り組みをより一層進めることが重要。例えば、「こんな生活を続けていると、こんな大変な老後が待っているかも?! 事例集」「子どもや孫世代の負担を減らそうキャンペーン」などにより、若い世代がやる気の出るような意識改革ができればよいと思う。
13	<p>(①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者は、若者の面倒を見たり、若者から頼りにされていると感じることで、生きがいを実感するのではないかと。 ・ 例えば、山の中の田舎で、一人住まいの高齢者が、夏休みに大学生を都会から受け入れ、一週間とか一か月、一緒に夕飯をつくったり、田んぼを耕したり、「世代間同居」みたいなことをしてみたらどうか。 ・ 同居して価値観や趣味の違いなどが出てくる可能性があるため、行政が予めマッチング調査して「世代間同居」をやってみたら、今後おもしろくなるのではないかと。

○提言一覧

テーマ:「人口減少時代における地域を支える仕組み」

No.	提 言 内 容
	<p>【ポイント2】 「住み慣れた地域・自宅で生活を継続するための支援の充実」といった視点から、 ①今後、「拡大すべき事業」、または「あれば良いと思われる事業」について ②①を推進するために必要な取組みや工夫したらよいと思われる点</p>
1	<p>① ・ 訪問型のサポート事業を拡大すると同時に、別の形のものも公募すべき。 ② ・ 商店と同額ではなく、配送にかかるコストを付加することにより、後世につけを残さない事業、継続していける事業にする。</p>
2	<p>① ・ 買い物サービスは拡大する必要がある。電球の交換や庭木の手入れなど高齢者では行えないことを支援する事業も必要。 ② ・ 宅配業者や郵便局等、地域に密着している事業者との連携</p>
3	<p>① ・ 民間の宅配業者との連携 ・ 在宅医療や在宅介護、デイサービスの施設の充実 ② ・ そこで働いてもらうために、働く側の若者にとっての住居、賃金などの補助や充実。働く側に魅力が増せば、自然と仕事を求め来てくれる若者も増える可能性があり、それが結果的には町の見守りにつながると思う。</p>
4	<p>① ・ 住み慣れた地域で生活するためには孤立しない生活が必要ではないか。今回見学したような訪問型支援(「小規模多機能ホーム」、「ほっとかない事業」)は不可欠。 ・ どんな地域に住んでいても、必要なときには等しく訪問看護や介護サービスが受けられることが今後大切と思う。 ② ・ 実際にその地域で生活している住民から生活実態や問題点を聞き取ることにより、その地域に合った政策を打ち出すことが可能となるのではないか。</p>
5	<p>① ・ 「ほっとかない事業『いろどり屋』」の取組みは、過疎地域に住む高齢者にとって生活必需品の購入だけでなく、話し相手や安否確認も担っており、これからも継続していくべき。 ・ 今回訪問した「いろどり屋」利用者との交流は貴重で癒された。若い世代(例えば大学生)と本事業を共同で行うことにより、地域住民と触れ合うことで癒され、過疎地域の現状を知ること、地域の活性化につながるのではないか。</p>
6	<p>(①②共通) ・ まず、「住み慣れた地域での生活を継続したい」という想いをなんとか実現させたいと感じた。 ・ 「住み慣れた地域での生活の継続」を実現するためには、コスト的に継続可能であることが必要で、行政から金銭面の支援をいつまでも続けているようでは厳しい。スタートアップまではある程度の支援を行い、その後は独立で採算が取れる形になるのが理想。 ・ 行政からの金銭以外の支援としては情報提供が考えられ、全国の様々な事業における工夫を行政が集約・提供することで効率化を図る。 ・ 事業の継続・収益化には人材が必要な場合が多いので、都市部から人を入れる施策も必要。具体的には、空家・休耕地といった田舎の魅力や安く提供することで都会から人を呼び込むが、田舎の人は見ず知らずの人には貸したがる。そこで、信頼できる地元の行政担当者が仲介すればよいのではないか。</p>

7	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 訪問販売事業と訪問配食事業に、高齢者安心見守りネットワークがしっかりプラスされれば更に充実するのではないか。 ・ 「ほっとかない事業『いろどり屋』」のような注文形式と移動形式のミニコンビニ、スーパーみたいな訪問販売型や配食専門の事業など、生活に密着した「買い物と食」に関する事業は更に拡大、充実すべき（民間参入業者との連携）。 ・ 「美馬ふれあいバス」のような、地域高齢者住民の足となる交通の確保と利便性の向上・充実。 ・ 地域高齢者を在宅で支えるための、医療・介護分野での、医師による在宅往診・訪問看護や訪問介護、そして訪問リハビリ ・ 全国初の「移動型ミニデイサービス事業」→事業所に送迎してくるのではなく、各地域の住民センターや集会所に出向いてデイサービスを行う事業（案）：入浴は移動式入浴車を使用、各種専門職は出向き、住み慣れた地域社会でサービスが受けられ、認知症症状の環境変化の防止にもなる。 ・ 「地域共同作業サポートセンター（仮称）事業」→共有地の草刈り、地域のお祭り・運動会の準備などを共同で継続して行うためのサポート事業 ・ 「農林バンク事業（仮称）」→休耕地や農林地の情報の収集・提供のほか、資材や機械の共同購入のサポートサービス ・ デジタル防災無線整備事業→地域住民への安心情報提供手段、今後の災害対策として必要。地域のICT化と一緒に考えていく。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 訪問販売系事業は、民間力を広く取り入れ、業種にとらわれることなく宅配業や郵便業、運送業等とも幅広く連携していくのも一つの方向性。 ・ 地域住民の足は、今後も維持・継続と利便性の向上への様々なサポート体制が必要。定期的な利用者アンケート、市民の声を参考に。 ・ 訪問系医療・介護サービスの充実は、もっと事業者が参入しやすくなるようコスト面でのサポートが必要であり、特に、移動費用（ガソリン代）が平地と比べ掛かるので、「中山間地域特別訪問加算（仮称）」などを保険内に報酬制度化して、大きく捉えていくべき。 ・ 介護予防事業のサテライト方式を認め、極小規模タイプのミニデイサービスが、それぞれの地域に応じた形で事業展開できるようなサポートが必要。→場所や制度の改正、報酬改正面の調整が必要。 ・ 地域の共同作業が少子高齢化で継続が難しくなるケースもあり、地域のサポートセンター等によるアイデアや人的面のサポートが必要。 ・ 防災対策としては、デジタル防災無線の整備は勿論のこと、ICTと安心サポートをつなげた事例も最近出てきており、方向性として共に考えて行くべき。
8	<p>(①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 幹線道路が近い場合、デマンドバスも考えられるが、もっと山の中であれば、木屋平のように地域協議会やNPO法人などと連携して「過疎地有償運送」等を考えるなど、それぞれの地域にあった交通システムを確立し維持していく必要がある。 ・ 「いろどり屋」の取り組みはすばらしいと思うが、採算を考えると「いつまでも持続可能か」という問題はあると思う。「大手の通販メーカーやコンビニなどを使って高齢者の見守りも含め仕組みをつくる」「地元商店の商品を使った場合のみ補助を出す」「地元商店は品揃えに努める」などの取り組みが必要ではないか。 ・ 自分の仕事である道路の維持管理は、過疎地域の交通や物流に関係しており、これからも継続的に落石・災害等から住民の「命の道」を守っていく必要がある。
9	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 住み慣れた地域・自宅で生活を継続するためには、話を単純化しすぎかもしれないが、健康の維持が一番ではないか。そのためには、高齢者にもできるだけ自宅を出る（できれば歩く）機会を増やすべき。今回視察した「オンデマンドバス」はそういった機会増加に資するもの。 ・ 「ほっとかない事業」のように自宅までサービスが届くというのは大変便利とは思いますが、サービスの提供者・利用者の関係から広がりが想像しにくいように思う。 <p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 富山市では高齢者の外出機会を増やしてもらおうと、「孫とおでかけ支援事業」という事業を展開しており、その心はというと、「心の通い合いであり、笑顔の創出」ということ。何かヒントがあるような気がする。
10	<p>(①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「いろどり屋」利用者の実際の声を聞き、買い物支援の重要性を感じた。「いろどり屋」では、買い物支援と見守りを行うなど、地域住民にとってなくてはならない事業だが、採算面で継続性が危惧される。地元スーパー、宅配業者との連携等で、採算のとれた仕組みがつけられるのではないか。 ・ 美馬市の「NPO法人こやだいら（過疎地有償運送）」の取り組みなど、地域の方が支え合う仕組みづくりを参考に、それぞれの地域にあった支援が必要。

11	<p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 移動手段の確保(移送サービスやバスの充実) ・ 買い物支援(食べることによる元気高齢者の維持) <p>②【ポイント1-No.10再掲】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 西部総合県民局保健福祉環境部(三好)が西部圏域を対象としたアンケート結果から、高齢者の考え方の傾向として、「まだ私は大丈夫」という考え(謙虚、迷惑をかけたくない等の気持ち)から、「日常生活での支援を必要ない」と考えてしまう傾向が見える。 ・ 逆に支援者(地域や行政、支援者【民生委員や高齢者施設職員】)へのアンケート結果では、「危なっかしくて見てられない」、「どんどん支援を受けるべきだ」、「支援を受ける準備をすべきだ」という傾向が見える。 ・ 以上から、支援を受ける高齢者と支援する側の意識のギャップを埋めることにより、高齢者を社会の担い手として考え、活用が広がり、また、高齢者が支援を必要とするハードルが下がり、住み慣れた地域で安心して生活ができるのではないか。
12	<p>(①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今回、買い物や移動をサポートする取組みを視察したが、今後、高齢化が進むにつれ、そのような取組みが一層必要になってくると感じた。ただ、このようなサービスを全ての地域で行うことは困難ではないか。 ・ 全地域で提供されている既存のサービス(郵便、宅配便など)と連携を図ることができれば、効率化につながるのではないか。
13	<p>(①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 行政は、住民の生活を守るために採算がとれないサービスも福祉サービスとして実施していく必要があるが、それだけでは住民のすべてのニーズに応えることはできない。住み慣れた地域で生活をするためには、行政の医療・福祉サービスと「ほっとかない事業」のような配食サービス、買い物支援、見守り活動といった地域住民や社会福祉法人、NPO法人、ボランティア団体などによる支援、いわゆる「インフォーマルサービス」の充実を図ることが必要と感じた。 ・ 行政としては、地域の民間団体の取組みの把握、新たな地域資源の発掘(インフォーマルサービスの担い手育成)、民間団体への情報提供、行政サービスとの連携などを進めていければよいのでは。 ・ 個人的には「認知症対策」が気になる。厚生労働省の推計では、2015年に65歳以上の約10%が認知症高齢者になるといわれており、自分や家族、近所の方など誰もが認知症高齢者になる可能性がある。認知症となると、徘徊行動や人格変化などがあるため、家族や近所の方に正しい知識がなければ、地域で継続して生活していくことはできない。 ・ そこで、県と市町村が実施している認知症に対する正しい知識を持つための「認知症サポーター」養成講座の受講者を増やしていく取組みがこれまで以上に必要と考える。地域住民の受講機会を増やすため、養成講座の講師となる「キャラバン・メイト」の養成を進めるとともに、「先ず隗より始めよ」で、地域福祉に関わる県・市町村職員が率先してサポーターになる取組みを進めてはどうか。具体的な提案として、新規採用職員研修に「認知症サポーター養成講座」を組み入れたり、県・市町村の福祉部局の新規職員に、毎年養成講座の受講機会を設けてみてはどうか。
14	<p>(ポイント1, 2共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 二つの課題と、「地域の方が生きる」とはどういうことなのかとの観点で考えてみた。 ・ 「生きる」というのは、衣食住という最低限のことに加え、「いきいきと生活する」ということが重要だが、今回視察した取組みは、どれも継続するには経済的にすごく厳しいというのが現状。 ・ 今後の課題は、それぞれの取組みがビジネスとして成り立っていくシステムの構築がまず重要と思う。 ・ あとは、地域住民一人一人が、地域を支える取組みの担い手であるという認識を持つような社会にしていく必要がある。 ・ それぞれの取組みの問題点についても、行政が関わって現状の把握や課題の洗い出しを行い一つずつクリアしていかないと、きちんとしたサイクルで回っていかないと思う。 ・ 行政の役割は、いろんな取組みに関して始める「きっかけ」をつくり、「人と人」「機会と機会」などをつないでいく。また、継続して成り立っている事業はサポートしていくこと。 ・ 何でも行政頼みでは、どんどん尻すぼみの地域になっていくのが目に見える。行政、地域住民、その他の人たちが一緒になって、「支え合えるような社会」というものに挑戦することが必要ではないか。

